

神からの呼びかけに応えた黒人女性 ―レベッカ・コックス・ジャクソン

二〇一六年六月二十二日

バイブル・サービス

山 田 恵

先日の修養会の講演は「神からの呼びかけに込めて」という内容でした。今日はその内容に関連して、私の専門領域からレベッカ・コックス・ジャクソン (1795-1871) という黒人女性を紹介したいと思います。彼女は文学史で名前が出てくるような有名な作家ではありませんが、近年その自伝がいくつかの批評で取り上げられています。今回バイブル・サービスで取り上げたいと思った理由は、彼女が、修養会でのお話のように、神からの呼びかけに込めて信仰に従って人生を送り、その経験を自伝という形で記しているからです。今日はその自伝をもとに彼女の体験を紹介しながら、神様からの呼びかけを聞くための秘訣を考えてみたいと思います。

最初にレベッカ・コックス・ジャクソンについてごく簡単に紹介します。彼女は一七九五年にフィラデルフィアの自由黒人として生まれました。三十五歳の時に、信仰上の目覚めによる神秘的な宗教体験をしたことがきっかけとなり、ビジョンや内なる声に従う形で伝道者となり、フィラデルフィアの黒人シェーカー・コミュニティの創設者となりました。自伝『力の賜物 (Gifts of Power)』は彼女のスピリチュアルな体験の貴重な記録となっています。そこでは、自分が神の意志を表すための選ばれた器だという深い確信に満ち、彼女の人生で神の目的が表現さ

れると信じていたことが記されています。

それでは、早速自伝から彼女の体験を紹介したいと思います。レベッカの最初の宗教的な体験は、一八三〇年七月、彼女が三十五歳のときに訪れました。ひどい雷雨の日で稲妻が彼女を恐怖に陥れます。そのときに彼女は自分が「神に召されるだろう」という声を聞きました。即座に彼女は、神の慈悲深い性質を思い、自分の罪がゆるされることを神に熱烈に祈りました。それはまさに回心の瞬間でした。その瞬間に、回心の前まで彼女を支配していた恐怖心が消え去り、「神と全人類に対する愛」の洪水を感じ、歓喜に包まれました。この体験は、レベッカにとって、初めて祈りを通して神とつながり、そして恩寵を受け取った体験となりました。こういった体験の後、レベッカは一層真剣に祈るようになり、神の声やビジョンに意識を向けるようになりました。

彼女はよく預言的な夢を見ましたが、その一つが「殺戮の夢」です。彼女の自伝の主なテーマは、突然の暴力の脅威に対して、神の保護を得るために祈り、そしてメッセージを受け取り、それに基づいて行動することの重要性です。ここで少しだけ当時の時代背景に触れると、レベッカがこのような宗教的体験をした一八三〇年代から四十年代の時期は、アメリカ国内で黒人に対する暴力が目立って増加した時期でした。彼女が住んでいたフィラデルフィアでも黒人が惨殺される事件が相次いでいて、彼女が見た殺戮の夢は、現実起こっている事件を象徴する夢でした。彼女が見た夢では、ナイフを持った暴徒に多くの黒人が滅多切りにされます。そのような状況下では、夫や兄弟といった男性はまったく助けにはならず、自分の力で生き延びる方法を探し出すしかないことをレベッカは夢の中で悟ります。彼女は、必死に神に祈るうちに、「あたかも死んでいるかのようにじっとしていなさい」というメッセージを受け取ります。それは頭上から聞こえ、その目に見えない、彼女を導く存在に気づきます。レベッカはその導きによって、殺戮から逃れられただけでなく、その情け容赦ない攻撃者に慈悲を乞うようなひどい屈辱からも

免れることができたのでした。

さらに、レベッカは、夢の中だけでなく、起きている間も未来を予知するようなビジョンを見ました。そのような体験を重ねるうちに、彼女は、ビジョンや内なる声を信じるのが大切だということを学んでいきます。それを痛切に感じた初期の体験では、二人の病気の女性の回心のために祈るようという内なる声を聞いた経験が記されています。しかしレベッカは恐れのためにその声に従うことができませんでした。最初の女性は白人でしたがレベッカに救いを求めていました。しかしこの女性の夫は明らかに黒人女性であるレベッカに偏見を持っていたため、その人種差別主義的な不当な扱いを恐れてレベッカはこの女性の家を訪問することをためらいます。内なる声は、この女性の家を訪問するように伝えていたにもかかわらず、恐れに支配されたレベッカはそれを実行に移すことができず、結果的にこの女性は神の恩寵を受け取ることなく息を引き取りました。二人目の女性についても、内なる声はレベッカに彼女が亡くなるであろうと伝えてきました。しかしレベッカは「間違った預言者」であると思われるたくないという恐れから、その女性を訪問することをためらい、やはりこの女性も神の恩寵を受け取ることなく亡くなってしまいます。こういった経験を重ねたレベッカは、自分が恐れに支配されて内なる声に従わなかったことをひどく後悔しました。

ここで皆さんは「内なる声」とは何かと疑問に思っているかもしれません。いろんな人がいろんなことを言っているのに混乱しないように説明の必要があると思うのですが、良い説明が見つからなかったため、私の言葉で説明したいと思います。大前提として、実は私たちの心の中の声にはいろんな声があるということを確認する必要があります。頭の中でごちゃごちゃと不平不満をしゃべっているのは自分の頭の中の声で、レベッカの言っている内なる声ではありません。こうでもない、ああでもない、こうしたい、ああしたい、という声は、単なる自分の頭の中

のおしゃべりです。内なる声は、そのおしゃべりをやめて、問題をすべて神様に預け、神様からの答えをすべて素直に受け入れる気持ちになったときに聞こえる小さいけれどもしっかりとした声です。実は古代から脈々と続く神祕主義の伝統では、この内なる声を神の声として大事にしてきました。キリスト教神祕主義でも同じで、昔から、神様は、「列王記上」の一九章一節〜二三節で語られているように「静かなささやく声」で語りかけると伝えられてきました。自分の内側からかすかに聞こえる、ささやくような声ですから、自分の頭の中の声がうるさいと聞こえないでしょう。自分の私利私欲、エゴの音がうるさかったり、また、どうしてもこうなってほしいといった願望が強すぎると、その自分の欲望や願望とは違う神様の声なんか聴きたくないという思いが働いてしまうので、せっかく神様からのメッセージが届いているのに、聞こえなかったり、無視してしまうことがよくあると思います。

さて、レベッカはどういった内なる声に気づきました。そして彼女は声だけでなくビジョン、つまり頭に浮かぶイメージによっても神様とつながれることに気づいたのでした。彼女の自伝の記述でもっとも興味深いのは、彼女が祈りによって「読み書き能力」を授かったと記していることです。レベッカの男の兄弟は全員読み書きができませんでした。したが、レベッカ自身は女性であったために教育を受けさせてもらえず、そのため読み書きができませんでした。手紙を出したいときは口頭で伝えてもらおうしかありませんでした。あるときレベッカは兄のジョセフに手紙の内容を伝え、ジョセフがそれを記してレベッカに読んであげました。その時、レベッカは、ジョセフが余計な言葉を付け加えていることに非常に不満を覚えました。そのため、手紙の言葉を変えてほしくないし、自分が書いてほしいことだけを書いてほしいと頼みます。それに対して兄は「お前は私が手紙を書いてあげた中でもっとも厄介なやつだ」と言い放ちます。その言葉と言い方が彼女の魂に剣のように突き刺さり、涙がこぼれたとレベッカは記しています。そして、そのときに、内なる声が彼女に語りかけます。その声は、「神に忠実であれば、書くことが

できるようになる時がくるだろう」と伝えてきました。この体験を経たのち、彼女は、実際に学んだわけではないのに、聖書を開くとその文字が読めるようになっていくことに気づきます。そして兄の前で聖書を開いて朗読し、驚かせます。祈りと宗教的な生活によって読み書き能力を神に授かった体験として彼女は自伝にそのときの様子を詳細に記しています。

このような信仰に基づく神秘的な体験を繰り返しながら、その体験を語ることによってレベッカは、教会のコミュニティで注目されていきますが、それは同時に男性の権威を脅かすことにつながりました。女性である彼女が自らの体験を語ることによって女性を束ねて力をつけていくことに男性たちは脅威を感じ始め、彼女が教会を分断しようとしているという批判が湧き上がっていました。レベッカは、正確で信頼できるビジョンや声を得るために禁欲的な生活を重視し、その重要性を強調していましたが、それも一層教会の男性権力者の反感を煽ることになりました。彼女は、当時の教会が「神聖な生活」を送り「キリストに従う」生活を教えることを怠っていると批判したために、それを快く思わない数人の男性聖職者による教会会議にかけられ、最終的には教会の活動から身を引かざるを得なくなりました。しかし、レベッカは、教会組織から離れたのちも伝道を続け、内なる声に従う形で旅に出ます。その旅の途中でシェーカーのコミュニティにたどり着き、そこで彼女と同じ信仰生活を重視する考え方の人が大勢いて、また歴史的な文書に彼女と同様の神秘的な体験をしている人が多く記されていることを知り、そのコミュニティに入ることを志願しました。この後、レベッカが中心となり、それまで白人ばかりだったシェーカー派に黒人のコミュニティを築いていくことになりました。

ここで再び歴史的な背景に少し触れたいと思います。レベッカが生きた時代より前のアメリカ社会では、公の場における発言権を持つのは男性だけで、女性が公の場で発言する機会ほとんどありませんでした。レベッカが公

の場で話すようになった一八三〇年代のアメリカでは、第二次覚醒運動の中でレベッカに限らず多くの女性が自分の魂への神の恩寵のはたらきを証言するという宗教的義務のもとでパブリック・スピーキングを初めて経験した時期でした。レベッカがもとと属していたメソジスト教会は、規則正しい生活方法(メソッド)を重視する宗派ですが、第二次覚醒運動の時期はこの宗派からホーリーネス運動という宗教運動が始まった時代でした。そこで強調されたことは、信仰上の目覚めに従うことで魂は聖霊に満たされ、罪が許され、神の恩寵を再度経験する「清め」が起こるということです。レベッカの自伝に記された初期の体験は、自分が体験した「清め」の記録であったと言えます。そのような自らのスピリチュアルな体験を語る機会を得ることで女性は宗教の領域における平等を経験しますが、そのことが、人の魂同様に社会も努力によって改善することができるものであるという認識を生み出しました。そして信仰生活だけでなく市民レベルにおいても平等が実現されるように要求する動きにつながり、その後の奴隷制廃止論や女性の権利獲得運動に至る社会改革の流れが広がっていきました。

レベッカの自伝を読むと、個人の宗教的体験を語ることがいかに当時の女性に自信と力を生み出していたか、そしてそれがいかに社会を変える原動力になっていったのかがよくわかりますが、そのような側面は特に黒人女性であったレベッカにとっては非常に重要なことでした。当時の黒人女性は、教育を受けることをすら稀で、社会における発言権は皆無に近い状況でした。しかし、レベッカは、スピリチュアルなビジョンや内なる声に従い、その体験を語ることで自分の内部だけでなく社会的な力も得ていきました。恐れを克服し罪から解放されるということにつながり、神と直接つながることができるという自信を生み出しただけでなく、社会的な力を得ることで大きく導いてくれたのでした。

このようにレベッカは、自らの体験を語ることで、アメリカ社会の底辺に位置する黒人女性であっても神の器になれることを社会に示しました。その体験を語る彼女の自伝は、後世に生きる私たちに、誰でも内なる声を聞くことができ、その声に従う勇気を持つことがいかに重要かを物語ってくれています。生きる時代は異なりますが、私たちも彼女のように自らが神の器となれることを信じて生きることがとても大事だと私は考えます。レベッカが伝えたかったことは、私たちは、全員平等に神様から愛されているということです。神様は私たちの本当の親で、本当に深いところまでつながっているのに、私たちの方がそれに気づかず、内なる声として響く神様の声を無視してしまっているだけなのです。私たちがすべきことは、自分の私利私欲に満ちた頭の中の声を静めて、素直にすべて受け入れる気持ちで内なる声を聞こうとすること、そしてその小さな声が聞こえたら、それに従う勇気を持つことだということ。レベッカは体験から学び、それを自伝に記しました。私たちも、自ら主体的に祈り、そして内なる声を受け取ったと感じたら、それを信じて行動する勇気を持つことでレベッカのように神の子としての本来の力を発揮することができるのではないのでしょうか。まず一日に五分でも十分でも、頭の中を静かにして、神様に意識を向ける時間を割くことから始めてみてください。皆さんにもきっと神様からの愛に満ちた静かな小さな声が聞こえるはずですよ。

(グローバル・スタディーズ学科准教授)